

知るなど、云事は、尤寓言にてはありながら不經至極の事也。且道理にも背きぬ。天地開けて國土自然に造化す、何ぞ人物の生ずる様に産育せんや。第一媾合の道は陰陽自然の道理、人として不知ものなし。一微禽の交るを見て而して後しると云事を得んや。かゝる不經の説、父子兄弟の間にては見聞するにも不忍也。古今人情は異なる事なし、是を以て教を立て神道など、云事可有ことにあらず。然れば三部の書は取に不足也。神武以來所傳の三種の神器こそ、神道の第一義なれ。吾儒の知仁勇の道に叶ふ。是を以て道を傳へて神道の根本とすべしと云ふ。先生答て曰。三部の書の趣を正し退くる所の論は、誠にさもあるべきに似たり。但し此三部の書を除て、何を以て神道の教へ傳る所とする事を得んや。正しき事は正敷聞ゆれども、吾儒も四書六經を除て、聖人の道こゝにありといはゞ可ならんや。且つ三種の神器を以て三徳の道を傳るといふ事も如何あらん。玉と鏡と劔とを以て三徳の彷彿に比して、其一徳づゝを象るといふは聞えて、是を以て道を傳るといはず、道を以て形氣の疎におとし入るといふもの也。恐くは六祖が衣鉢を傳る

と申様成おもむきに成るべし。何ぞ道を見ることの忽諾なるや。此事疑なきに非ずと被申達候處、貞齋不心服。三種を以て三徳に比し、是を以て傳道の本根とするを以て形氣の疎に落し入ると云ならば、吾夫子川上に在して水の流るを以て道體を示し給ふも、亦道體を水に落し入るといふて可也と返答す。是水の流を以て直に道體と見るの誤也。二度答書を被裁候得共、貞齋とても合點可仕得様子にて無之に付、尊書は不被遺。此度禮幹に示し給ふが故に文集の内へ加置きぬ。

一、器非其任功勢相傾といふ事

唐太宗の時劉洎が上疏の内に、器非其任功勢相傾といふ事あり。此功勢の二字註解みえず。某政要侍講の時おもへらく、功は己が少にても骨折いさをしの覺あれば、夫を以て威權をたて、勢は今所任の官位高祿の勢を以て、相互に勢聲を張て人を傾け世に用ひらるゝ様に仕なす事也。古人は只一筋に君の爲國の爲に成事迄に心を用ひて、且て己が功業におごり、我が威勢を振ふ所へは心もつけず候。一心に忠貞を存すると、忠貞を不存とのたがひより大違ひに成事也。

一、茂對時の時の字義

茂對時无妄象傳此時の字甚廣し。太古中古以來其時代々々も時也。一年の内春夏秋冬も時也。只其時に應對し候事也。一日の内も晝夜の十二時、其時々々に對し少も送迎の心を不起食時と云も此意也。往者不逐來者不迎今々々と工夫すべし。食時の二字陰符經に見えたり。

一、心は一身の主宰也

艮其背不獲其身行其庭不見其人。心の不動ことを工夫すること、前後左右何事ありとも、少しもそこに心を不着也。艮其背は眼を背に付る事也。心其止りを得て不動こと肝要也。心は一身の主宰なれば譬へば屬子の要の如し。天地は反覆すとも、一身は轉倒すとも、一心體に存すれば何等の事出來すとも、不動心を要にする事大切の儀也。平生存養の工夫なくして、一旦其効を取らんとすとも何ぞ得んや。是心要とする心は、的の黒星の如し。

一、天地の化育悉く教に非ざることなし

灰燼糟粕無非教と横渠被申候。天地の化育悉く教に非ざることなし。風雨・霜露・雷霆の威に至るまで、一々其道理

あつて然り。雨露の恩も雷霆の威も、同じく天地の教と云ふ所能く合點すべし。天地の道理は廣大無邊にして會得し難し。今君恩を以て譬へみて親切なり。父母・妻子・僕従を養育し、衣食・居所以下日用の萬端細微の事に至る迄、各大小高下に隨て君恩の所致に非ざる事なし。これを推て天地の化育皆教の存する事を可知也。

一、那波道圓、南龍公を諫む

那波道圓紀州へ仕官の時、南龍院殿自身ためしものを被成、其道具殊の外能く切候よし御喜被成、道圓へ御向候てか様の切物は唐にも有之間敷と被仰候。道圓承之、いづれに唐にも稀に可有御座候か。但し御前ほどの大名の、自身に人を試し申人は、唐にも有之間敷と申候へば、不機嫌に御成、唐ならばとて大名の、自身人を試すまじき事にては無之と被仰候へば、桀紂は自身も試し可被申と答候。其儘奥へ御入被成候。其後道圓へ逢候て、先日桀紂の譬にて不快に思ひ候へども、能く思案すれば自身の試しあるまじき事也。以來はふつゝ被成間敷と被仰候よし。道圓詞章の徒といへども、其時代の儒者は如此の所あり。